

広島城内に現存する戦争遺跡に関する研究

広島工業大学 正会員 ○大東 延幸
 近未来コンクリート研究会 フェロー会員 十河 茂幸
 (公財)広島市文化財団広島城 主任 秋政 久裕

1. 広島城内の防空作戦指令室について

史跡広島城内には、大日本帝国陸軍の中国軍管区司令部防空作戦司令室が現存している。これは国内の主要都市に整備され、戦時下の空からの敵襲情報の収集と分析、空襲警報等の発令を担っていた。原爆の投下時には、爆心地から約 900mの位置にあったが被害を受けながらも通信機能を維持し、被爆の事実を最初に他都市に通報した施設であるとされている。構造は鉄筋コンクリート造、面積約 208 m²の半地下式一階建てである。この施設の管理者は広島市であり、公益財団法人広島市みどり生きもの協会が指定管理者として管理している。本論ではこれまでの調査研究をまとめ、今後の課題を検討する。



図1 広島城内の防空作戦指令室の内部の様子



図2 防空作戦室に隣接する構造物の外観

2. 防空作戦指令室の調査について

この調査は、平成 26 年度に広島城の被爆 70 周年記念展示のため公益財団法人 広島市文化財団 広島城の主任(学芸員)の秋政久裕氏より、広島工業大学 工学部 都市デザイン工学科(土木系・当時)の十河茂幸教授(コンクリート工学)へ調査の依頼である。調査は非破壊の範囲で、平成 26 年度は、構造形式・使用材料・防空性能・健全性の調査、平成 27 年度は、詳細な図面の作成・近接構造物の内部と地下埋設物の確認・関連の文献調査、平成 28 年度は、防空作戦室の床面の詳細な調査・関連の文献調査を行った。

3. 排気塔の様に見える構造物の調査と考察

図 2 で示す構造物に近接して、平面上の屋根で横から見ると T 字型に見える、煙突か排気塔の様に見える構造物がある(図 2～4 参照)。平成 27 年度で調査した構造物は図 3 の中央部のやや土が盛り上がった部分である。

この排気塔の様に見える構造物は、防空作戦指令室と同様にコンクリート製で、外寸が約 800mm のほぼ正方形の断面で、その厚さが約 100mm で、内寸が約 600mm のほぼ正方形の穴が下のほうに向かって空いている、正方形の筒状の構造物である。断面は上から下まではほぼ同じで、下の方で指揮連絡室に接している(図 5 参照)。

この排気塔の様に見える構造物の側面の開口部からこの穴を覗くと(図 4 参照)、約 4m 下に底が見えるが、残念ながらゴミと思われる物が積もっており、構造物としての底



図3 排気塔の様に見える構造物の位置

キーワード 広島城, 中国軍管区司令部防空作戦室, 保存と活用,

連絡先 広島工業大学工学部都市デザイン工学科 〒731-5193 広島市佐伯区三宅 2 丁目 1 - 1 Tel 082 - 921 - 5483



図4 排気塔の様に見える構造物

の様子を知ることはできなかった。また、長い間ゴミが積もったのか、ゴミがたまっている部分の高さは周囲の地面より約1m程度高く、この換気塔の様な構造物の下の方の内部の底と側面の様子はこのゴミのため、様子を観察することはできなかった。

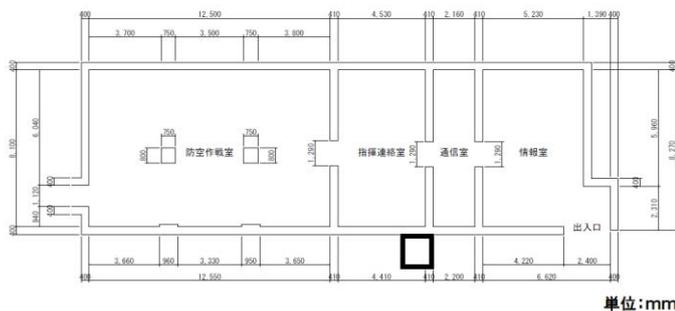


図5 排気塔の様に見える構造物の位置

この換気塔の様に見える構造物は、前述のとおり指揮連絡室に接しているが、指揮連絡室の方にはこの換気塔の様に見える構造物に向けて何の開口部もなくまた開口部を埋めた跡も無い。図5にこの換気塔の様に見える構造物の位置を黒い太い四角で示す。この換気塔の様に見える構造物は明らかに煙や熱などの気体の類を内部から外部へ放出させる施設であると考えられるので、どこか熱を発生するところや排気ガスなどを排出するために作られたと考えられるため必ずどこかにつながっていると考えられるが、前述のように長年のゴミがたまっていたため見えないと考えられる。

現在の所、平成27年度で調査した結果から、何らかの機械が置かれていた場所からこの換気塔の様に見える構造物へつながっていたのではないかと考えられるが、まだ未知の空間がある可能性もあり断定はできないと考える。

4. 関連する文献調査

現在、(公財)広島市文化財団広島城主任・秋政久裕氏を中心として継続的に関連する可能性のある当時の文献の調査を行っている。この防空作戦室そのものに関する記録はほとんどが破棄されているが、広島城内に存在した軍に関する記録や、防空や空襲に関する他の施設の記録や軍としての対応、等を検討することで、この防空作戦指令室に係る証拠につながる可能性がある。前述の空調設備が存在した可能性についても、冷房の冷媒と考えられる物質が納品されていた記録が見つかり、冷房が備えられていたという過去の証言を裏付ける事も出来た。防空作戦指令室の機能を考えた場合、冷房の機械以外にも必要な機械はあるはずでこの点からも検討を進める予定である。

また、終戦直後からしばらくの間の広島城内の現在の護国神社付近を撮影した写真を集め現在の姿と比較検討するも行っている。図2に写っている入り口のような部分も終戦直後には開いていた事も解っている。終戦直後の防空作戦司令室及びその周辺の様子と、1950年ごろのそれらとでは変化があり、この間にこれらの構造物に何らかの変更が加えられた可能性が高い事も明らかになったが、管理者側にこれに関する記録が残っていない事も明らかとなった。

5. まとめ

これまでの調査研究^{1) 2) 3) 4)}から、まだ入れる可能性のある所があるが現在は入れない所があると考えられ、本年度はそのような箇所への立ち入り調査を目指して行動してきたが諸事情で実現していない。しかしながら平成27年度で調査した、まだ入れていない空間の存在を確認する事が出来、3章に述べたように換気塔の様に見える構造物の調査と考察から何らかの空間の存在が予想される。これらの関連を突き止めるため、今後も調査活動を継続する予定である。

謝辞

本稿の調査研究にあたっては、管理者である広島市・公益財団法人広島市みどり生きもの協会殿に謝意を表します。

参考文献

- 1) 十河：中国軍管区司令部防空作戦室 調査報告書、2015年1月
- 2) 大東・十河・秋政：広島城内に現存する戦争遺跡に関する研究、平成28年度 土木学会中国支部研究発表会、2016年5月
- 3) 大東・十河・秋政：広島城内に現存する戦争遺跡に関する調査研究、土木学会第71回年次学術講演会、2016年9月
- 4) 大東：広島城内の戦争遺跡に関する調査研究、2019年度日本建築学会大会(北陸)学術講演会、2019年8月